

UR

UR都市機構の情報誌 [ユーアールプレス]

P R E S S

2013

vol. 35

自治会地団

〔特集〕

「いざ」に備えて

〔巻頭インタビュー〕

石原良純

高い防災意識が、命を救う

C O N T E N T S

1 「いざ」に備えて

3 [巻頭インタビュー]

石原良純さん

高い防災意識が、命を救う

7 CASE 1 助け合い

〈大島六丁目団地〉

ドキュメント★夜間自主防災訓練
訓練で絆を強めて万が一に備える

11 CASE 2 まちづくり

〈京島三丁目地区〉

燃え広がらないまちをつくれ
密集市街地の防災力をアップ

15 CASE 3 地域連携

〈みなとのもり公園〉

非常時に備えた公園に
若者の活気を取り込む

19 復興の最前線〈岩手県陸前高田市〉

市民の命を守る高台移転、かさ上げ工事

**ダンブ200万台分
の土を運ぶ計画**

21 クロスワードパズル&プレゼント

22 URからのお知らせ

「津波に強いまちづくりの検討
に係る手引き」を策定

大榎町大ケロ地区災害公営住宅が
地域住宅計画賞(作品部門)を受賞

表紙は「大島六丁目団地」の防災訓練(写真:野弘路)

季刊「ユアールプレス」
vol.35 (2013年 11月)

発行 独立行政法人都市再生機構
〒231-8315
神奈川県横浜市中区本町6-50-1
横浜アイランドタワー
Tel. 045-650-0892 / Fax.045-650-0889

編集・制作 I&S BBDO
デザイン ボールドグラフィック
印刷 大日本印刷

1-2ページの写真: 野弘路



CASE 2

〈京島三丁目地区〉

「一人でも多くの人を助けたい」
防災まちづくりを支えた強い使命感

まちづくり



CASE 3

〈みなとのもり公園〉

日常の中で「防災」を意識
若者が集うメモリアルパーク

地域連携



CASE 1

〈大島六丁目団地〉

住民主導で防災訓練
徹夜のプログラムは真剣さの証し

助け合い



「いざ」に備えて

東日本大震災は日本列島に大きな傷跡を残し、
私たちに自然災害の恐ろしさをあらためて突きつけた。
地震だけではない。豪雨、豪雪、竜巻、地崩れ、火山噴火など、
災害は常に私たちの身近にある。
「いざ」に備えて、各地でさまざまな取り組みが行われている。
特集は、「助け合い」「まちづくり」「地域連携」を
キーワードに、3つの取り組みを紹介する。
巻頭インタビューでは、気象予報士でタレントの石原良純さんに、
自然災害への心構えなどを聞いた。



interview with
**YOSHIZUMI
ISHIHARA**

——近年、異常気象が顕著に増えているのを感じます。ただ都会に暮らしていると、雨や風が命にかかわるということがピンとこない人も多いようです。

自然への畏怖の心を忘れず、謙虚に受け止めることが必要

——近年、異常気象が顕著に増えているのを感じます。ただ都会に暮らしていると、雨や風が命にかかわるということがピンとこない人も多いようです。

——ニュースで「これまで経験したことがない雨」などと報道されるのをよく耳にします。いま、地球上では何が起きているのでしょうか。

石原 地球温暖化の影響で海水の温度が上がると、海面から大量の水が蒸発し、空気中の水分量が増えているのです。日本の都市は、1時間に50mmの雨を想定してま

——ニュースで「これまで経験したことがない雨」などと報道されるのをよく耳にします。いま、地球上では何が起きているのでしょうか。

石原 それは、とても危険なことです。例えば1959年(昭和34年)の伊勢湾台風で約5000人の方が亡くなりました。元来、日本は気象災害に見舞われやすい風土であるため、かつては雨風で命を落とす人が多かったのです。それを克服するために気象観測、予報、情報伝達、さらには土木技術まで、全ての分野で研究、対策が進み、随分と平穏に暮らせるようになったりました。

石原 それは、とても危険なことです。例えば1959年(昭和34年)の伊勢湾台風で約5000人の方が亡くなりました。元来、日本は気象災害に見舞われやすい風土であるため、かつては雨風で命を落とす人が多かったのです。それを克服するために気象観測、予報、情報伝達、さらには土木技術まで、全ての分野で研究、対策が進み、随分と平穏に暮らせるようになったりました。

それを優に超える量の雨が降っているのです。

と予想されます。

今年9月に報告された国連の『気候変動に関する政府間パネル(IPCC)』によると、十分な対策が行われなければ、今世紀末の世界の平均気温は1986〜2005年の平均値に比べて最大4.8℃も上がるのだそうです。

——今後、日本でもさらに災害が増えるということでしょうか？

石原 今年9月の台風18号で京都の桂川が氾濫し渡月橋が濁流にのまれた映像や、関東平野で発生した竜巻が運動会のテントを吹き飛ばす映像を見てショックを受けた人も多かったことでしょう。数十年前と比べて竜巻や

石原 今年9月の台風18号で京都の桂川が氾濫し渡月橋が濁流にのまれた映像や、関東平野で発生した竜巻が運動会のテントを吹き飛ばす映像を見てショックを受けた人も多かったことでしょう。数十年前と比べて竜巻や

石原良純

「巻頭インタビュー」
高い防災意識が、命を救う

局地的な大雨や豪雪、竜巻など、これまでに経験したことのないような自然の脅威にさらされることが多い昨今だが、災害から命を守るために、どんな心構えを持つべきだろうか。気象予報士の石原良純さんに、気候変動の現状と私たちが取るべき行動や備えについて伺った。

★以外の写真＝吉澤咲子 取材・文＝宇治有美子

生まれ育った湘南で、幼い頃から空に浮かぶ雲を眺めるのが好きだったという石原良純さん。お天気好きが高じて、超難関の気象予報士試験に挑戦し、1997年に見事に合格。以来、ニュース番組などの親しみやすい天気解説が好評を博している。

近年は、ゲリラ豪雨や爆弾低気圧、竜巻などによる災害が多発していることから、その原因や対策について、気象予報士として意見や解説を求められることが増えているという。

今後ますます気候変動が深刻化することが予想されており、「想像を超えるような災害がどこで起こってもおかしくないという」ことを認識し、命を守るための防災意識を高めてほしい」と注意を呼び掛ける。

——近年、異常気象が顕著に増えているのを感じます。ただ都会に暮らしていると、雨や風が命にかかわるということがピンとこない人も多いようです。

空を見上げれば天気が分かる!?



積乱雲

夏空に浮かぶ積乱雲は白く輝いて見えるが、雲の底は黒く不気味に見える。急に冷たい風が吹いてきたら、積乱雲が近づいてきたサイン。激しい雨や雷に見舞われる恐れがある



巻雲

筆で絵の具を伸ばしたような模様の、すじ状の雲。すじ雲と呼ばれることもある。巻雲は空の高い位置でできるため、雲粒は氷の粒。高気圧に覆われたときによく現れるので、天気は比較的良好



巻積雲

白い碁石を敷き詰めたような雲で、いわし雲やうろこ雲とも称される。「秋空に浮かぶ巻積雲が好き」と石原さんも絶賛する美しい雲だが、この雲が現れると徐々に天気が崩れていく



災害は、1に自助、2に共助、3に公助。 まずは自分の身を守り、 その上で近隣の方々と 助け合うことも必要です

interview with
**YOSHIZUMI
ISHIHARA**

突風の数が増えているし、これまで大雨の被害がなかった地域での水害も多くなっています。気候変動による災害は、残念ながら今後も増えていくと考えられます。これからは、どこに暮らしているも従来の経験則では測りきれないような災害が起こり得るし、それによって命を落とす危険があることを一人ひとりが認識しなくてはなりません。

気候の変動によって起こる気象災害が避けられないいま、被害を最小限に食い止めるためには、日ごろから防災への意識を高めておくことが重要になる。

自分や家族の身を守るために近隣との共助が欠かせない

—— 私たちにはいま、気象災害に備えて、何ができるのでしょうか？

石原 100年に1度、1000年に1度の災害にどう備えるか？とても難しい問題です。僕にも明確な答えが見つかりません。

ただ、防災意識を高めるなど、自衛策を取ることが出来るはず

です。

僕は神奈川県出身ですが、1970年代ごろまでの神奈川県では、土砂災害が多かった。小さな土砂崩れがしょっちゅうあつて、私の家も門が半分埋まったことがあります。その対策として神奈川県は、地盤の緩い地域は地面をコンクリートで固めました。そのおかげで最近では、土砂災害はほとんど起こらなくなったのです。古くから住んでいる人はこう

した歴史を知っていますが、新しく移り住んできた人は自分の住むまちの成り立ちを知らない人が多い。もし知らなければ、どんな地質でできていて、どういった災害が起こりやすいかを、まずは「知ること」が防災の第一歩だと思います。

—— マンションや団地などの集合住宅が主催する防災訓練やイベントがありますが、そうした行事に積極的に参加するなど、日ごろから近隣の人々とコミュニケーションを取っておくことも大切

でしょうか。

石原 そう思います。特に一人暮らしをしている人は、自分がそこで暮らしていることを誰かに知っておいてもらわないといけない。万が一、土砂災害で土に埋まってしまったとしても、存在を知らなければ、誰も助けようがありません。僕も一人暮らしをしていた頃は、毎朝近所の方に挨拶をするのはもちろん、意識的に近所の方々とコミュニケーションを取るようになっていましたよ。

災害は1に自助、2に共助、3に公助と言いますが、その割合は自助が5割で共助が4割、公助は1割ほどのようです。まず、自身の身を守る。その上で地域や近隣の人たちと連携することで、助かるケースがとて多いのです。

—— 石原さんは、家庭でどのような災害の備えをしていますか？

石原 食料と水、懐中電灯、非常用袋などを用意しています。また、伝言サービスや避難場所、昼と夜それぞれの避難経路など、非常時の行動についても家族間で

話し合っています。家族の身を守るためには人任せにはせず、自分たちで考えて行動することが大切です。

私たちが災害から身を守るためには、気候に関する正しい情報を得ることが欠かせない。石原さんをはじめとした気象予報士の活躍の場は、今後ますます広がります。

—— テレビなどの気象予報に関心を持つことも、災害から身を守ることに繋がるといいます。

石原 昔の天気予報は、地図上に晴雨のマークを示すだけでしたが、その後レーダーなどの観測網が発達し、情報量も増えてきました。そんなとき、僕が師匠と仰ぐ気象予報士の森田正光さんは、視聴者の目線で生活に密着した情報を分かりやすく伝えようと、「洗濯指数」や「ビール指数」などを伝え始めたのです。僕も天気キャスターをするようになってからは、まず視聴者の方に天気予報に興味を持ってもらい、その延

長線上で防災意識を高めてもらえるようなプラスαの情報を伝えようと心掛けています。最近の天気予報はそんなふうに変わってきていますよ。

テレビやラジオのほか携帯電話話など、いまはさまざまな手段で情報を手に入れることができます。だから毎日、天気予報をチェックしてほしい。それと同時に、自分が住んでいる空を見上げることが大事です。

黒い雲が近づいて、ゴロゴロと雷の音が聞こえているのに、平気な顔で「天気予報では雨が降らないって言うたから大丈夫」とすましている人が意外と多くて、驚くことがあります。リアルな情報が入り頭上にあるのですから、天気予報と現実の空とを照らし合わせる習慣も一緒に身に付けてほしいと思います。

毎日空を見る習慣を付けたら気象の異変に敏感になる

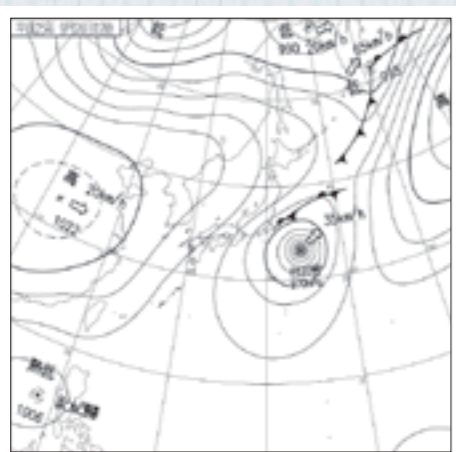
—— 専門的な知識がなくても、毎日空を見るようにすれば、危険を察知できるようになるものですか？

石原 綺麗な花にはトゲがあるとありますが、実は空も自然の一部だからでしょうか、綺麗に見えるときこそ、危険な兆候が潜んでいることが多い。いま雨が降っていないことも、突然冷たい風が吹いてきたり、変わった雲が近づいてきたり、変わった雲が近づいてきたら警戒が必要です。1年ぐらい毎日空を見上げてみると、天気図が読めなくても、そうした空の異変に気付くようになるものです。

—— 空を眺めることは、石原さんの最大の気分転換でもあるのか？

石原 海や山といった自然の中では、人は安らぎを感じますよね。実は、海より広く、山より高いものが、もっと身近にあるのです。そう、空です。空は一番身近な大自然だから、眺めるだけで人間を落ち着かせる力があるのだと思います。それに下を向くより、上を向いた方が、ぐんと視野や思考も広がります。「1日に1度は空を見上げましょう」。これは僕がとて大切にしている言葉です。皆さんも、空を身近に感じてほしいですね。

取材当日は台風が関東に接近中でした！



画像提供: 気象庁

取材当日の天気図を熱心に見ていた石原さんが、「今日の空は、雲がとて綺麗なんです」と話し始めた。「『いつもの空とは少し様子が違う』と思ったら、やはり台風が近づいている。空は早くも異変を察知しているのです。頭上の空を眺めるだけで、1000km南の台風にまで思いをはせられるってすごいことですよ」。

自分の住むまちの空を見上げれば、空が知らせてくれるサインを受け取れるようになる。気象災害を回避することにもつながりそう。



取材当日の天気図について目を輝かせながら解説してくれる姿から「天気好き」の素顔がこぼれる

ドキュメント



助け合い

CASE 1



おおしま
大島六丁目団地
東京・江東区

夜間自主防災訓練 訓練で絆を強めて 万が一に備える

日が落ちた18時半すぎ、東京都江東区の大島六丁目団地の広場に、防災リュックを担いだ居住者が集まりだした。夜間の地震発生を想定し、翌朝にまで及ぶ本格的な防災訓練が始まった。万が一に備え、居住者の絆の強化を目指す訓練に密着。団地の防災力を上げる取り組みや考え方を取材した。

★以外の写真：野弘路
取材：文川信彦



18:30
震度6強の
地震発生

自治会副会長の齊藤康則さんは、防災活動の中心となって居住者を引っ張る

災害対策本部
大島六丁目自治会



団地中央の広場に災害対策本部のテントを張る自治会メンバー（上）。暗い中で、懐中電灯の明かりを頼りに名簿を確認するも、夜間訓練ならではの対応（下）



19:20



防災設備の確認・点検

訓練には、消防署も協力。消防車を団地の近隣に止め、署員が消防設備の使い方を説明する



19:30



けが人、要援護者の移送・手当て



居住者が倒れたたんすの下敷きになりけがをしたことを想定した救助訓練（上）。毛布で応急タンカを作り、けが人を運ぶ訓練（中）。心臓マッサージの訓練（左下）。足の不自由な居住者を車いすで避難させる訓練（右下）



要援護者を救護するグループ、各棟の防災設備を点検するグループに分かれ、それぞれ動き始めた。けが人の応急処置と移送は地元消防署員の指導のもと実施。室内のたんすが倒れてけがをした居住者を、毛布を使って応急のタンカを作り、屋外へ移送した。一方、救護グループは、自治会で把握しているリストをもとに、数人1組で足の不自由な居住者などを訪ね、無事を確認。車いすに乗せて屋外に連れ出した。

「防災訓練を毎年11月に行っており、居住者はひと通りの防災知識を身に付けています。ただ万が一の際、本当に重要なのは『自分で考えて動く』ことです。指示待ちにならない、臨機応変に動く大切さを共有できればと考え、今回はあえて綿密なプランは用意しませんでした」（齊藤副会長）。

「団地ができて40年以上たち、居住者の構成は大きく変わりました。70歳以上の方が700人以上暮らしていて、要援護者が約120人います。こうした方々を助けるためにも、実践に即した訓練が必要ですよ」と自治会長の中島

8月23日金曜日、まだ昼間の暑さが少し残る18時半。夕闇の中、大島六丁目団地の各棟から、ヘルメットや帽子をかぶり、防災リュックを背負った居住者が中央広場に集まってきた。広場に設置された災害対策本部のテントで、懐中電灯の光を頼りに点呼を行う。こうして、翌朝にまで及ぶ長い防災訓練が幕を上げた。

大島六丁目団地は都営地下鉄新宿線大島駅から徒歩1分の場所にある。総戸数は約2900戸。11〜14階建ての7棟から成る。敷地内にスーパーマーケットや各種の店舗があり活気がある団地だ。

「私は何をやっていいの!」「俺はどこに行けばいいんだ?」。集まった参加者から戸惑いの声が上がった。しかし、防災関連団体の役員経験がある自治会の齊藤康副会長は「今回はぶっつけ本番で役割分担も決めていません。どのくらい参加してくれるかも未知数です。スケジュールもおおまかです。そのほうが実践的ですから」と今回の趣旨を伝える。

齊藤副会長の指示で、けが人の応急処置と移送を行うグループ、

政幸さんは言う。

次に行ったのは避難経路の確認。大島六丁目団地は近隣の広域避難場所に指定されている。大規模災害が発生した場合、近隣住民が団地内に避難してくる。江東区と自治会が協定を結んでいることもあり、津波発生の際には避難者を上階や屋上に誘導する必要がある。その際の避難場所や経路をチェックした。

炊き出しや深夜の巡回も

小さなトラブルは、炊き出しの調理機器を出そうとした備蓄倉庫でも、「鍵は誰が持っている？」「俺は持っていない」「本部でしょ？」。また、「カレーは何人分温めるの？」という疑問の声も。訓練参加人数がうまく伝わっていない。こうしたドタバタはありつつも、スケジュールは順次、進行。21

時すぎには、大集会所で、参加者は炊き出しのカレーライスを食べた。食事後は防災ワークショップを開催、講師は齊藤副会長が務めた。自作のスライドなどを使って防災の意義や課題、防災グッズの使い方などを参加者に易しく解説した。

ワークショップに参加したインド人のシン・ラメシュさんは仕事帰りに駆け付けた。自動車メーカーにエンジニアとして勤務するシンさんは10年前に来日し、4年前から大島六丁目団地で暮らす。「自治会棟代表の一人として、外国人居住者と日本人との橋渡しを務めています。いざというとき慌てないため、こうした訓練は非常にいい経験になります」

同じ頃、中島会長や自治会防災部メンバーは別室で防災対策会議を開き、現在までの訓練の反省点を話し合った。あちこちで上がった疑問や戸惑いの声を聞いていた中島会長は「避難ルートや備蓄倉庫の鍵の管理など、分かっていると思っていたことでも、実は曖昧だったことがいくつも明らかになりました。それが分かったことが

居住者の助け合いを訴える

翌朝6時すぎ、参加者が再び大集会所前に集まってきた。全員でラジオ体操を行い、その後、中島会長と齊藤副会長が訓練を締めくくった。そこで二人が強調したのは、居住者が助け合う絆だ。

「震災発生時にすぐ対応できるのは町会や自治会などの地域のコミュニティです。つまり一番大切な初動時に力を発揮するのが、居住者同士の連携という絆です。今回の訓練でも協力することの大切さが再確認できたと思います」と中島会長。

齊藤副会長も「まずは自分が自主的に判断してしっかり行動しましょう。そして、さらに居住者同士

がもっとお互いのことを知って声を掛け合っていきましょう。一番、防災力を強くするのは、ご近所に知り合いを増やすことです。今回の訓練が、そうしたコミュニケーションの機会になれば、よかったです」と語った。

実際、訓練の中で参加者たちが、声を掛け合う姿があちこちで見られた。「あなたは何階？ うちが13階」「うちは10階だけ地震でエレベーターが動かなくなると大変よね」といった会話。「お隣に足の不自由なおばあちゃんがいるの。自治会のリストに入っているかしら」といったご近所を気遣う声。

「東日本大震災でも建物に大きな問題は生じませんでした。団地内はこの地域の中では安全な場所だと思っています。ただ、高い防災力を支えるのは、最終的には居住者同士の協力です。訓練を重ねて地域の絆をもっともつと強くしたいと思っています」と中島会長は目標を話した。

最後に非常食や太陽光で充電できるLEDライトなどの防災用品を配り、解散。日をまたいだ長い訓練が終了した。



翌朝の訓練スタートはラジオ体操から(右)。最後に非常食など防災用品を配布した(左)



団地の防災力アップに力を入れる自治会の中島会長は、居住者同士の協力を訴えた



21:30

防災ワークショップ



防災関連団体の役員経験がある齊藤副会長の防災講座に参加者は熱心に聞き入った(上)。ワークショップに参加した外国人居住者のシン・ラメシュさん。防災グッズの使い方を熱心に学ぶ(下)

21:00

炊き出し、宿泊場所への誘導



炊き出しも訓練の重要なプログラム。みんなでカレーを食べて一体感を深める

20:00

近隣避難所への経路確認



訓練は敷地外にも及んだ。近隣の避難所へのルートを実地確認した





周辺のまち並み。古い木造家屋が軒を連ね、その間を狭い道路が縫うように走る。大地震時には沿道家屋の倒壊で道路を避難路として利用できなくなる上、火災が燃え広がるのが心配される



京島三丁目一帯。木造家屋の密集地が広がる

京島三丁目今年7月に完成した地上5階建て鉄筋コンクリート造の集合住宅。不燃化は防災まちづくりの基本だ

まちづくり

CASE 2



京島三丁目地区
(防災街区整備事業)

東京・墨田区

燃え広がらないまちをつくれ

密集市街地の防災力をアップ

東京・墨田区の京島周辺は古い木造家屋が密集し、大地震時の危険性がかねて指摘されてきた。その一画にある「京島三丁目地区」で今年7月、36世帯が入る鉄筋コンクリート造りの白い瀟洒な集合住宅が完成した。足掛け13年にわたりUR都市機構が関わってきた防災街区整備事業による防災施設建築物だ。周辺道路も拡幅され、災害時における地域の安全性向上に大きく役立っている。

★以外の写真=的野弘路
取材・文=茂木俊輔



今年7月に完成したばかりの集合住宅の前で。当地区の防災まちづくりに携わったUR都市機構の中條由規（写真左）と石垣曜子（右）。まちづくりに協力してくれた権利者との久しぶりの再会を喜ぶ

燃えさがる自宅を前に、「子どもが中に入っているんです！」と叫ぶ母親。制止を振り切り、いまにも火の海に飛び込もうとしている。阪神・淡路大震災の惨状を、その時、救援に当たった行政マンが涙ながらに語ってくれた。UR都市機構の中條由規は、防災まちづくりで仕事を共にしたその行政マンの、決意のような言葉が忘れられない。「こんな光景は二度と見たくない。まちづくりという仕事に携わる中で、この子、この母、一人ひとりを助けられるべきがあるならば、われわれはそれに挑戦し続けなければならぬ」。中條は、この言葉を思い返す度に胸が熱くなる。「私たちも力を尽くして協力していかなければいけない」と強く思う。

そんな中條にとって、自身が2003年から約2年間携わった「京島三丁目地区防災街区整備事業」が完了したという知らせは、本当にうれしいニュースだった。京島周辺は、災害発生時の危険性がかねて指摘されてきた。戦災



UR都市機構東日本都市再生本部 都心業務第1部市街地整備チーム 中條由規

を免れたものの、戦前の木造住宅が軒を連ね、その間を狭い道路が縫うように走る。古い木造住宅は地震の揺れに弱く、火の手が上がれば、燃え広がる危険性も高い。東京都が5年ごとに公表する「地震に関する地域危険度測定調査」で、総合危険度は常に上位にランクされてきた。

複雑な権利関係を解きほぐす

家を建て替えながら道路を広げる防災まちづくりの取り組みの歴史は古い。墨田区では1980年代から検討に乗り出し、地域住民と協議を重ねてきた。しかし容易には改善されない。その難しさを、区の担当者である秋山和栄氏は次のように語る。「皆さん、いまのコミュニティや環境を変えたいという思いをお持ちですし、特に高齢者の方に」とって引越は大きな負担となり、防災まちづくりの進捗は大変難しいものがあります。しかも借地権者や借家権者が多く、土地・建物の権利関係は複雑。相続が生じれば、交渉はより難しくなる。「土地の権利関係が複雑で、土地所有者、借地権者、借家権者の3者の協力が必要になります。折衝を重ねると時間が経過し、高齢の権利者の方々がご亡くなりになることも。新たな権利者にはじめから協力を仰ぐこともありました」（秋山氏）

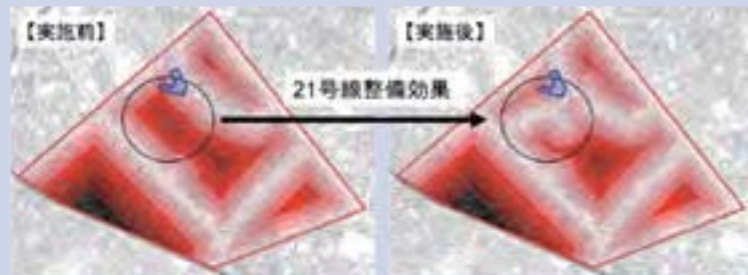


墨田区都市整備部都市整備課集積担当 秋山和栄氏

災害時の危険性を的確に伝えるために 「避難困難度」という新たな指標を生み出した

道路整備による6m道路のネットワーク化⇒避難困難度の改善

避難困難度(オリジナル指標):道幅6m以上(震災時に沿道建物が倒壊しても通行可能な幅員)の道路までの距離により判定。短いほど、避難しやすい。



「避難困難度」とは、沿道建物が地震で倒壊しても逃げられる道幅6m以上の道路に至るまでの距離をもとに指標化したもの。図中の赤色が濃いほどこの指標が高く、防災上は問題が大きい。事業実施後は、主要生活道路21号線の整備(13ページの囲み記事参照)によって、図中丸印の箇所「避難困難度」が大きく改善された様子が分かる。



防災街区整備事業によって道幅2mから4mに広げられた建物南側の道路



建物南側の道路は道幅4mから6mに広げられた主要生活道路につながる

「京島三丁目地区」の従前の様子(★)



小さな区域でも不燃化を実現する

「防災街区整備事業」

防災街区整備事業はいわば小型の再開発。一定の区域内で建物と道路を面的に整備する手法だ。土地・建物を所有する権利者はその権利が評価され、同等の価値の土地・建物を新しく取得できる。権利者はその権利を生かすことで、大きな金銭の持ち出しなしに事業に参画できる。

最大の特徴は、土地の権利をそのまま土地の権利に置き換えられる点だ。京島三丁目の事例では、区域内に墨田区が所有していたまちづくり事業用地の権利を、連棟式戸建て住宅の底地の権利と、避難路として機能するように広げた道路の権利に置き換えた。

区の底地上には定期借地権を設定し、区域内

に留まるものの戸建ての建物への居住を希望する借地権者に移転していただいた。借地権者は戸建て住宅に移り住むことができる上に、そのために必要な自己負担を抑えることができる。こうした工夫によって、所有者に比べ一般には権利評価の低い借地権者も事業に参画しやすくなった。

ただ、この事業は敷地面積が最低100㎡以上なければ適用されない。借地権者の権利をそのまま定期借地権に移したのでは、その規模にまで達しない。そこで、1つの敷地に2人分の定期借地権を設定し、建物は2戸を並べる連棟式を採用した。



主要生活道路である21号線を道幅4mから6mに、区画道路1号を道幅2mから4mに広げることができた

るが、警戒感が先に立つのか、耳を貸そうとする権利者は少なかった。打開策を模索する中で、石垣は考えを改めた。「当初は、話を聞いてくださいという一方的な姿勢だったように思います。相手の話を聞き、一人ひとりの事情を受け入れることから始めよう、と途中で思い直しました」。ちょうど最寄りの曳舟駅近くの現地事務所に着任するようになったこともあって、努めて地域周辺を歩いた。事業ではなく、暮らしを話題に会話を重ねようという心掛けた。いくら訪ねても会えない相手には、手紙を書くことを始めた。用意した便せんに残す「お元気ですか」というひと言に、気持ちを込めた。

「あなたが危ない」

「あそこのお店が…」「今度のお祭りは…」と、次第に何気ない会話を交わせるようになった。また現地事務所で行う駅前再開発が進んでいたことが、自分の仕事を理解してもらったのに大きく役立った。

「あなたが危ない」という住民の不安には、いくつもの選択肢を用意することで応えた。区域内に新築する集合住宅や戸建て住宅に移る選択肢のほか、区域から転出し、区がすぐ近くで整備するコミュニティ住宅(賃貸住宅)に移る選択肢も用意した。



UR都市機構東日本都市再生本部* 総合戦略部アセット戦略室 施設経営チーム 石垣曜子

住民と言葉を交わせるようになって、石垣は少しずつ話題を、核心に近づけていった。大切なのは、「防災まちづくりが自分自身の問題である」と理解してもらうこと。住民の防災意識はもともと高い。しかし建て替えまでとなると、さらに大きなエネルギーが必要となる。「みんな危ない」という説明ではなかなか伝わらないし、行動にまで結び付かない。「あなたが危ないんです」ということを、できるだけ分かりやすく伝えるよう心掛けた。

「同じコミュニティの中で住み続けたい。それができるのか」という住民の不安には、いくつもの選択肢を用意することで応えた。区域内に新築する集合住宅や戸建て住宅に移る選択肢のほか、区域から転出し、区がすぐ近くで整備するコミュニティ住宅(賃貸住宅)に移る選択肢も用意した。

で、約0.2haの区域が定まった。新しく設けられたばかりの国の「防災街区整備事業制度」を活用し、避難路として利用できる道路を整備すると同時に、集合住宅と戸建て住宅を新築するプランだ。

ヒントを得た1枚の写真

中條は計画担当として検討を重ねた。防災街区整備事業制度をUR都市機構として初めて活用しようという手探り状態の中で、事業の計画を練り上げた。ただ、事業を前に進めるには、地区内の権利者の参画はもちろん、国や区の支援が欠かせない。それには災害時の区域の危険性を具体的な数値で、権利者や国・区に示す必要がある。しかし既存の指標では地区の危険性をうまく表現できない。「伝える道具がなければ、つくることができない」。中條は心を決めた。

密集市街地で大地震の被害はどのような形で現れるのか、阪神・淡路大震災に学ばうと、資料をあさった。すると、1枚の写真が目が留まる。そこには、瓦礫の山を前にぼうぜん立ち尽くす高齢女性の姿があった。「この人に瓦礫の山は

越えられない」。それがヒントになって、中條は「避難困難度」という指標を生み出す。地震の揺れには命拾いしても、逃げ道がなければ燃え広がる火の手に巻き込まれる。家屋が倒壊しても避難できるだけの広さの道路が不可欠だ。避難路にできる道路の幅は6m以上。その道路までの距離をもとに「避難困難度」を指標化した。

確かに「避難困難度」の指標を用いると、この区域に防災街区整備事業制度を適用する社会的な意義がくつきりと浮かび上がる。公共性を明確にできれば、国や区は支援しやすい。ただ、いくら大義名分が立つとも、肝心の住民・権利者が事業への誘いに応じてくれなければ決して前には進まない。住民・権利者の理解と協力をどう得るか。

防災まちづくりの次の段階を担ったのは石垣曜子だ。合意形成の鍵を握る区域内の権利者宅へ、東京・新宿のオフィスから現地に同僚と2人1組で足を運んだ。区の職員と共に雨の日も、猛暑の日も、毎日のように訪ね歩いた。こ

UR都市機構がこの区域で防災まちづくりに乗り出してから足掛け13年。今年7月、5階建ての集合住宅が完成した。それに呼応するかのように、周辺では古い住宅を建て替える動きが出てきた。建て替えに伴い、道幅も広がる。防災まちづくりはじわりと周辺に広がりはじめた。



みなとのもり公園は、三宮を南側に進み、阪神高速道路を越えた場所にある(左上)。スケートボード、インラインスケート、BMXなどさまざまな競技で使えるコースも設けている(右上)、ローラーホッケーコート(右中)、ストリートダンス用のステンレスの鏡(右下)



★ ストリート系スポーツだけでなく、ランニング、バスケットボール、サッカーなどさまざまなスポーツが楽しめる



車輪が1列に並んだインラインスケートは、フィギュアスケートのように滑ったり、ホッケーをするなど多様な楽しみ方がある(上)。BMXで様々な技を決めるフリースタイルは迫力満点(中)。ストリートダンスのチームなどの練習場所にもなっている(下右)。馬の代わりにBMXでポロを楽しむ「バイクポロ」は女性も楽しむ(下左)



★ 写真提供: 大阪ハードコートバイクポロ

地域連携

CASE 3



みなとのもり公園
(神戸震災復興記念公園)

神戸・中央区

非常時に備えた公園に若者の活気を取り込む

兵庫県神戸市の中心部、三宮にある「みなとのもり公園」(神戸震災復興記念公園)。普段は多くの若者やファミリーがさまざまなスポーツにイソしみ、歓声が絶えない。非常時に備えた公園に、若者を含めた市民の活気を取り入れて、都市の防災力アップにつなげている。

★以外の写真=的野弘路 取材・文=岡田真奈美



ニュースポーツ広場でフリーラインスケートを楽しむ吉川美和子さん。日本フリーラインスケート振興会の代表、上田達士さん(左から3人目)も声援を送る

あと三つ、二つ、一つと、見物人がかたずをのんで見守るのは、女性スケーターと、1列に等間隔で置かれた三角形のコーン。一つも倒さず縫うように滑り切ると、大きな拍手が沸き起こった。

スケーターの足元を見ると一般的なローラースケートとは明らかに違う。「フリーラインスケート」といって、スケートボードを真ん中で割ったようなものです」と、日本フリーラインスケート振興会の代表、上田達士さんは説明する。

ここは神戸市のみなとのもり公園のニュースポーツ広場。JR三ノ宮駅徒歩15分の場所にある。この日の空は雨模様だったが、阪神高速道路下のスペースもあるののでぬれずに楽しむことができる。ナイター設備もあり、深夜0時まで利用可能。

フリーラインスケートは最近ファンが増え始めたストリート系スポーツの一つ。特別な競技場ではなく道路などで気軽に楽しめるストリート系スポーツは、若者を中心に愛好者が急増している。ただ、道路や公園で邪魔者扱いされることも多いという悩みがある。

それに対して、みなとのもり公園なら気兼ねなく、思いっきり楽しめる。フリーラインスケート以外にも、スケートボード、インラインスケート、自転車も自由自在に操るバイシクルモトクロス(BMX)競技など、さまざまなストリート系スポーツを楽しむ若者の歓声が絶えない。

みなとのもり公園には、芝生の広場もあり、サッカーなどを楽しむ利用者も多い。さらにその周囲は、1周約460mのランニングコースにもなっている。

将来の災害に備える公園

みなとのもり公園は愛称で、正式名称は神戸震災復興記念公園という。名前の通り、阪神・淡路大震災で被害を受けた神戸市が、その経験や教訓を後世に継承するために計画した公園だ。神戸のまちが復興から発展へと前進する姿を木々の成長とともに見つめていくという思いが込められている。神戸市とUR都市機構が事業主体になり2010年1月に開園した。公園の場所がかつてJR貨物神戸港駅だった。そこで使われていた

地域のニーズに合わせた 防災公園をつくる



桃井原っぱ公園

東京都杉並区のJR西荻窪駅北口から徒歩20分の場所に「桃井原っぱ公園」がある。その名前の通り、約4haの公園に広大な「原っぱ」が広がる。特別な遊具などがない広々とした空間がcaえって新鮮で、都内にいることを忘れてしまうほど。この公園もUR都市機構が手掛けた防災公園の一つ。公園内には耐震機能を持つ貯水量100tの地下貯水槽2基や、非常用防災トイレになるマンホールが70カ所も設けられている。

UR都市機構ではこのように地域のニーズや要望に合わせた防災公園街区整備事業をこれまでに全国で20カ所手掛けている。



公園の清掃や草刈り、枝打ちもできるだけ利用者自身が行うようにしている(左上)。そうした作業で出た枝を備蓄して、炊き出しの燃料に使っている。使うコンロや食器なども公園内の倉庫に準備している(右上、左下、倉庫の場所はMAPの⑤)

人が公園を育て、公園が人を育てる

神戸市建設局公園砂防部
管理課 東野 太 整備担当課長(左)
計画課 福田英明 計画係長(右)



みなとのもり公園は、構想段階から市民と行政が一体になって整備・検討を進めてきました。市民参画型の公園づくりは開園後も続き、いまでは継続的に公園を利用しているグループと行政が一つのネットワークでがっちりつながっています。

ここでは、東日本大震災で甚大な被害を受けられた自治体をはじめ、全国から大勢の方が視察に来られます。参考にさせていただくことがあるとすれば、単なるメモリアル公園をつくるのではなく、将来的に活用し続けられる公園になるよう、人のネットワークを絡めながらハードウェアを整備していくことかと思えます。人が公園を育て、公園が人を育てる。これが管理運営に携わる私たちが思い描く理想像です。

練習するためでなく、掃除のために集まったダンスサークルの大学生(右)。通常、業者に任せる草刈りも市民の手で行っている(下)



① 非常用発電施設
エネルギー関連では200kW級の自家発電施設などを備える



② 手動ポンプ
水関連では200tの地下貯水槽や、それにつながった手動ポンプなどがある



通路部分の62基のマンホールはテントを張れば簡易個室トイレになる

③ 災害用仮設トイレ

④ 安全の鐘



JR貨物神戸港駅で使われていた時計に鐘を組み合わせたモニュメント

⑤ 備蓄倉庫



備蓄倉庫には毛布2000枚、飲料水2016本などを備える

みなとのもり公園 MAP

みなとのもり公園では、災害時に備えてさまざまな設備を設けている。水、電気、食料、毛布、炊き出し用品など生活に必要なものがひと通りそろっている。



ストリート系スポーツを取り入れる際、力を尽くした佐藤由美子さん(右から2番目)。現在もさまざまな種類のストリート系スポーツのメンバーと意見交換を重ねている



公園づくりのスタートから現在まで、みなとのもり公園を見守り続けている辻信一さん

R都市機構に意見を取り入れていただきました」(辻さん)

みなとのもり公園のもう一つの特徴は、利用者が管理・運営に積極的に関与していること。開園以来月に1度、開催している運営会議には、ストリート系スポーツの代表者も参加している。そこで自分たちに何ができるかを考えて提案し、活動している。その結果、清掃や草刈りなどは極力利用者が行うようになった。

もちろんストリート系スポーツのメンバーもこうした活動に参加している。佐藤さんは清掃の日に参加したダンスチームのメンバーに、語り掛けた。「清掃の日だけでなく、毎回5分だけでもゴミを拾って。常に綺麗にしてあげばゴミを捨てる人が少なくなるから。あなたたちができることをダンスみたいに表現して。阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸から、『私たちもちゃんと生きてます』と伝えれば、それが東北の復興支援につながるのよ」。

ストリート系スポーツの愛好者

「最初の計画では、高速道路の下部分は駐車場でした。もっといい利用法がないかと検討する中で、大勢の若者が集まり活気が出る利用法として、ストリート系スポーツというキーワードが浮上りました。しかし神戸市や私は、ストリート系スポーツのことをよく知りませんでした」

そこで加わったのがNPO法人北神戸園ボランティアネットの理事長、佐藤由美子さん。神戸市内の別の公園でスケートボードなどが楽しめるスケートパークづくりに取り組んだ経験を持っていた。

「競技スポーツの目的は勝敗や記録という数字。ストリート系スポーツは、若い子が生きていくための文化。あまりよくないイメージを持たれてしまうこともあるけれど、私に言わせればストリート系スポーツをしている若者はみんなかわいらしい。そして、いざというときにはものすごい力を発揮してくれます」と佐藤さん。

「ニュースポーツ広場の計画では実際にストリート系スポーツを楽しむ若者の意見を反映しました。路面の素材などについても

にとつて、みなとのもり公園は非常に大切な場所だ。インラインスケートを履いてホッケーを行う「ローラーホッケー」を楽しむ高木栄彦さんは「無料で深夜0時まで利用できるのは、全国でもここだけだ」と話す。馬の代わりにBMXに乗ってポロを楽しむ「バイクポロ」をプレーする長谷川信雄さんも「ここはバイクポロができる日本一の常設コート。全国規模の大会も開催しています。バイクポロの聖地です」と語る。

「公園を大切に思っ、愛着を持つ若者がたくさんできました。そうした若者が管理・運営だけでなく、炊き出しなど防災訓練に積極的に参加してくれるようになりました。この積み重ねがいざというときに役に立ちます」と辻さん。

防災公園は設備を用意しただけでは力を発揮できない。それを使う人々の協力が不可欠だ。ストリート系スポーツなどを通して公園への関心を深め、運営に参加する市民を育てるみなとのもり公園の取り組みは、防災力アップを目指す東日本大震災の復興まちづくりの大きなヒントになるだろう。

時計が中央に設置されている。時計は午前5時46分 阪神・淡路大震災の発生時刻で止まったまま。その下に鐘が付けられ、大震災の経験と教訓を後世に伝えるモニュメントになっている。

みなとのもり公園は、こうしたメモリアルとしての役割に加え、災害に備えた防災公園としての役割も担い、多くの設備を持つ。例えば通路部分に並ぶマンホール。テントを張れば仮設トイレになる。ほかに備蓄倉庫や非常用発電施設などが配置されている(下図参照)。

みなとのもり公園の特徴の一つは計画策定に市民が参加したこと。みなとのもり公園運営会議の代表でありまちづくりコンサルタントでもある辻信一さんは「全世界からの応援やボランティアの活動が与えてくれた勇気と力が震災復興の後押しをしてくれたことを、後世の社会に伝えていこうという思いが、公園づくりの大きな原動力です」と話す。辻さんは、2002年7月の公園建設に向けた市民ワークショップに参加し、その後も、ずっとボランティアとして関わってきた。

「最初の計画では、高速道路の下部分は駐車場でした。もっといい利用法がないかと検討する中で、大勢の若者が集まり活気が出る利用法として、ストリート系スポーツというキーワードが浮上りました。しかし神戸市や私は、ストリート系スポーツのことをよく知りませんでした」

そこで加わったのがNPO法人北神戸園ボランティアネットの理事長、佐藤由美子さん。神戸市内の別の公園でスケートボードなどが楽しめるスケートパークづくりに取り組んだ経験を持っていた。

「競技スポーツの目的は勝敗や記録という数字。ストリート系スポーツは、若い子が生きていくための文化。あまりよくないイメージを持たれてしまうこともあるけれど、私に言わせればストリート系スポーツをしている若者はみんなかわいらしい。そして、いざというときにはものすごい力を発揮してくれます」と佐藤さん。

「ニュースポーツ広場の計画では実際にストリート系スポーツを楽しむ若者の意見を反映しました。路面の素材などについても



希望の象徴として再生・保存された「奇跡の一本松」。その奥で、大量の土を山から平地部に迅速に運ぶためのベルトコンベヤーの建設工事が急ピッチで進む



復興の最前線

第2回 [岩手県陸前高田市]

市民の命を守る高台移転、かさ上げ工事 ダンブ200万台分の土を運ぶ計画

岩手県陸前高田市は、東日本大震災で市街地が丸ごと津波にさらわれ、約1800人に及ぶ死者・行方不明者が出た。市職員の多くも犠牲になり、ゼロどころかマイナスからの復興を迫られた。UR都市機構は2011年4月から職員を派遣、以来ずっと同市の復興まちづくりを支援している。現地ではいま、膨大な量の土の移動を伴う大掛かりな工事が、安全を最優先に進められている。

写真：井上健 取材：文：茂木俊輔



「試験盛土」工場の現場で。右から、陸前高田市都市計画課長・山田壮史氏、UR都市機構陸前高田復興支援事務所・中島啓、同・綿谷光城

ち込む。「最初の1年は私も市内の仮設住宅で暮らしました。周りの皆さんも、いつ家を再建し、そこに移れるのか、大変気に掛けていました。それを考えると、10年掛かる事業でも2、3年でやり遂げる覚悟で臨まねば、と気が張ります」

「試験盛土」で不安を解消

交う土の量は約1000万m³、ダンブカーに換算すると約200万台分以上に及ぶ。

しかし、平地部から高台に土地の権利を移すために協議・調整を必要とする地権者は2000人規模に及ぶ。一方、対応できる職員は市とUR都市機構合わせても約40人にすぎない。協議・調整は迅速に進めなければならないが、「ひとさまの財産ですから、大切に扱う必要があります」。数十人規模の地権者がいるような一般の事業でも、多大な労力と時間を要するが、ここはけた違いのボリュームだ。協議・調整は住民だけでなく、国や県、鉄道会社などの関係機関に及ぶ。すべての要望を盛り込むのは至難の業だ。「見直しに見直しを重ねて、ようやく最適解が見えてきた段階です」

工事規模も並ではない。高台を整備するのに山を最大80mも削り、かさ上げ部はまち1つ分を約10mほど盛土する。まち中を行き



住民との個別相談会に臨むUR都市機構陸前高田復興支援事務所の中島啓

「試験盛土」で不安を解消 工事担当は、今年4月に着任した綿谷光城だ。盛土の安全は最優先事項。そのための工夫が冒頭で紹介した、高台部の搬出土を活用した試験盛土だ。市内4カ所で実施。かさ上げ盛土の安定性を検証し、将来のまちの安全を担保する。「地盤の沈下量を計測しながら、盛土の安定を確保できる施工方法を決定するとともに安全性を具体的な数字で明らかにします」綿谷。盛土の仕上がりを見れば実際に見てもらうことで、盛土に対する住民の不安を解消する狙いもある。大量の土をスピーディーに運ぶ工夫がベルトコンベヤーの活用。大量の土を高台からかさ上げ部に迅速に運び出すために、幅1.8m、総延長約3kmに及ぶ大型のベルトコンベヤーを設置する。ダンブカーを減らし、交通事故の危険を大きく減少させることにも寄与する。ベルトコンベヤーが国道上をまたぐ箇所では、土がこぼれ落ち

ないように落下防止カバーで覆う。「本格稼働後は1日に約2万m³を運び出せるので、ダンブカーに比べて圧倒的にスピード化が図れ、安全面でも優れています」と綿谷はそのメリットの多さを語る。すでに基礎工事が進んでおり、来年3月には稼働できる見込みだ。ベルトコンベヤーの基礎が、そして盛土の山が、新たなまちの希望を乗せる土台として市内の各所で徐々に姿を現し始めた。復興まちづくりに向けた取り組みはようやく目に見える形になってきた。岩手県から陸前高田市に、震災直後から支援のため出向してきている都市計画課長の山田壮史氏は、「昨年までは計画段階で事業の進捗が見えにくかったのですが、工事が始まり、復興への実感がわき始めています。URにはこれから復興事業のエンジンとしての

ガーッと10t積みのだんぷカーが斜面を駆け上がる。大量の土を頂に落とすと、ブルドーザーがそれを丹念にならしていく。かさ上げ工事に向け、試験的に築く高さ約10mの盛土現場からは、海岸線に唯一残る復興のシンボル、奇跡の一本松が見える。白砂青松の美しい海岸線が日本百景にも選ばれ、多くの観光客を集めた陸前高田市は、今回の大地震による津波で壊滅的な被害を受けた。市は復興に向けて、山を削って整備した高台に住宅を再建するとともに、旧市街地をかさ上げし、そこに新しいまちをつくり上げる計画だ。UR都市機構が市との協定に基づき、これら土地区画整理事業のすべてに取り組み。5倍の速さで事業を進める

UR都市機構陸前高田復興支援事務所の中島啓は2012年4月に着任した。「現在、市内6カ所で高台の整備を進めると並行し、残る高台の整備と平地部のかさ上げに向けて手続きを進めています」と語る。来年2月にはすべての工事に着手できる段階に持役割を期待しています」と、市民の思いを代弁する。 工事はこれから本格化する。中島は、いま、図面を離れ、将来のまちの姿に思いを巡らせている。どういった人が住み、そこでどんな暮らしがあるのか。市の伝統行事「けんか七太」の山車と山車が激しくぶつかり合う勇壮な様子や、「うごく七太」の華やかな飾りを付けた山車が新しいまちの中を練り歩く姿も頭に描いてみる。笑顔でそれを眺める市民の姿が、そこにはある。 「まちづくりは『心』を入れていかなないと前に進みません」と、中島は言う。計画に込めた「心」が具体的な形となって姿を現す日は近い。中島は、そう確信している。

陸前高田市におけるUR都市機構の復興まちづくり支援

復興市街地整備	地区名	面積
	今泉	124ha
	高田	192ha
※面積は事業計画等の面積を表す(小数点以下四捨五入)		
災害公営住宅整備	地区名	戸数
	下和野	120戸
	水上	30戸
	大野	40戸
	田端	20戸
※戸数は計画戸数を表す 2013年11月1日時点		

「津波に強いまちづくりの検討に係る手引き」を策定

南海トラフを震源とする巨大地震の発生が懸念されるなか、UR都市機構は、津波被害が想定される地方公共団体への支援強化を図るため、「津波に強いまちづくりの検討に係る手引き」を策定しました。

本手引きは、緊急避難施設や災害応急対策活動拠点など主にハード対策を中心にまとめており、地方公共団体による津波防災まちづくりに関する対策の検討などに活用していただくことを目的と

しています。

手引きをご覧になった地方公共団体の皆さまからは、「分かりやすい」「東日本大震災の復興の現状と併せて説明してほしい」といったお声をいただいています。UR都市機構では、引き続き地方公共団体へ本手引きのご紹介や、東日本大震災の復興支援を含むUR都市機構の防災まちづくりに関する取り組みなどについて、ご案内をさせていただきます。

本手引きの内容や津波に強いまちづ

くりの検討に関するご相談などがありましたら、お気軽にお問い合わせください。



地方公共団体の依頼により復興の視察、手引きの説明を実施(写真は宮城県気仙沼市内)



UR都市機構 都市再生部 全国まちづくり支援室地方都市戦略チーム
Tel:045-650-0877

<http://www.ur-net.go.jp/produce/tsunami-bosai/>

大槌町大ケ口地区災害公営住宅が地域住宅計画賞(作品部門)を受賞



受賞した大ケ口地区災害公営住宅

UR都市機構が岩手県大槌町から要請を受けて建設した大ケ口地区災害公営住宅が大槌町とともに、第8回「地域住宅計画賞(作品部門)」(主催:地域住宅計画推進協議会)を受賞しました。

この賞は、地域の環境や文化などを大切にしながら、地域自らの創意と工夫による、他の模範となるような住まいづくり・まちづくりを行った住宅や活動に贈られるものです。

スピードが求められる災害公営住宅の建設ですが、当住宅では限られた時間と予算の中でも、周辺のまち並みになじむ低層の木造和風住宅とし、木材の約6割は大槌町産のものを使用しています。また、地域住民の交流の場として広場や集会所も設けました。

今後も当地区の住宅づくりのように、地元へ貢献できる復興支援に努めてまいります。

編集後記

普段からのコミュニケーションこそ、最大の防災になり得る。今回の取材で学んだことです。大島六丁目団地自治会の齊藤康則副会長は、「防災コミュニケーション」という言葉でそれを表現されていました。自分の存在を知ってもらうことがどれほど大切かを石原良純さんをはじめたくさんの方に教えていただきました。まちづくりでも、ハード面の安全・安心の整備はもちろんのこと、コミュニケーションというソフト面の配慮も不可欠だと改めて感じました。

「UR PRESS」Web版もお楽しみください!



内容充実の「UR PRESS」Webサイト。特集の巻頭インタビューや記事のオリジナル動画なども掲載しています。ぜひサイトもご覧ください。

UR PRESS

検索



<http://www.ur-net.go.jp/publication/web-urpress/>

URのツイッター

UR都市機構のツイッターでは、イベント、キャンペーン、募集情報などをタイムリーに発信しています。ぜひアクセスしてみてください。

http://twitter.com/UR_TOSHIKIKOU



タテのヒント

- 1 駅伝でつなぐ物
- 2 ○○になる=寝ること
- 3 日なたぼっこで、こっくり、こっくり
- 5 ⇄敵
- 6 水と混ぜたら泥んこ
- 8 引いたり、渡ったり、缶詰だったり
- 11 イベントや番組の進行役
- 13 頭の防寒具
- 15 ゴールドコイン
- 16 色気よりこっぴが勝る食いしん坊
- 17 冬の訪れを知らせる北風
- 18 今日の次の日
- 19 おでんに欠かせない根菜
- 21 オペラ、日本語では?
- 24 網を張って獲物を捕らえる節足動物
- 26 停留所で止まります

ヨコのヒント

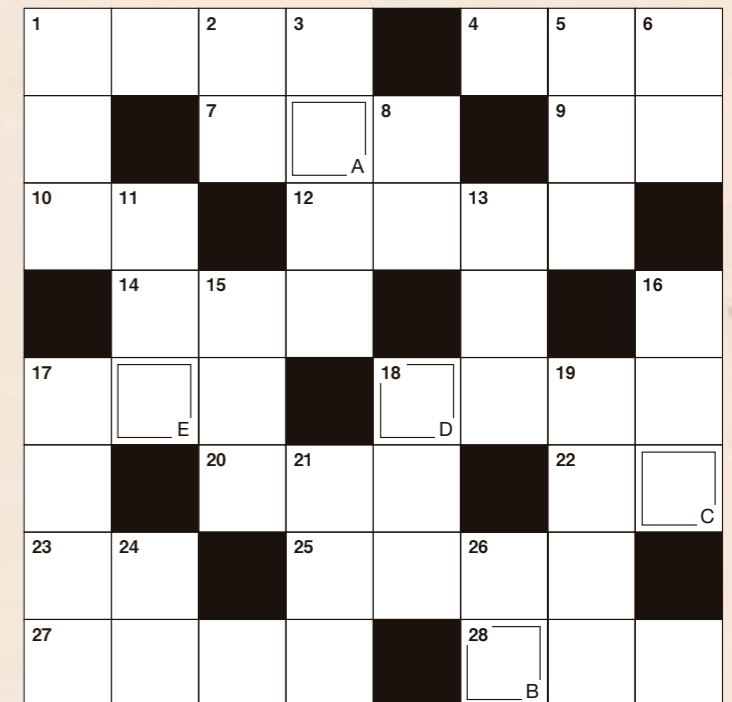
- 1 日なたぼっこの熱源です
- 4 ナイショ
- 7 4本足の暖房器具
- 9 ⇄負け
- 10 将棋や囲碁のプロ
- 12 「棚からぼた餅」の略は?
- 14 この曲がり角で、たき火
- 17 通貨
- 18 交通費
- 20 稲刈り後はご用済みの見張り番
- 22 ドングリが、はまったところ
- 23 苦は○○の種
- 25 靴の収納場所
- 27 陰暦 11月の呼び名
- 28 ちょっとした心づけ

プレゼント付き CROSSWORD PUZZLE

[クロスワードパズル]

クロスワードパズルの解答をアンケートはがきに記入して応募ください。抽選で10名の方に東日本大震災復興支援グッズをプレゼントいたします。

マジックスタジオ=作



Answer



Present



陸前高田市復興支援グッズ「ゆめちゃんトートバッグ」

抽選で10名様にプレゼント!

*この商品の売り上げの一部は復興支援事業運営費、陸前高田市に寄付されます。
販売:NPO法人 陸前高田市支援連絡協議会Aid TAKATA
<http://aidtakata.org/>

34号の解答



応募要項

UR PRESS vol.35 読者プレゼントへの応募は、本誌に同封の応募はがきにクロスワードパズルの解答と必要事項をご記入の上、郵送ください。

応募の締め切りは
2014年1月31日
(当日消印有効)です。

当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

——— 街に、ルネッサンス ———



UR都市機構